

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	高嶋由布子
論文題目	言語の身体性と主観性に関する知覚表現の認知的研究		
（論文内容の要旨） 本論文は、認知言語学の観点から見た日常言語の知覚表現の理論的・実証的研究である。 第1章では、本研究の目的と言語学の研究における知覚表現の分析の位置づけ、この分析から得られる言語学的知見の文法論、意味論の研究における位置づけ、本研究で分析の対象とする知覚に関わる言語現象の位置づけがなされている。 第2章では、本論文の知覚表現の具体的な分析の前提となる認知言語学の枠組みを概観している。本章では主に、本研究の知覚表現の分析の背景となる理論的な枠組みとして、ラネカーの認知文法、レイコフの認知意味論、タルミーの虚構移動理論に関する基本概念を整理し、認知言語学の研究分野においてこれらの枠組みが担う理論的役割を明らかにしている。 第3章では、まず本論文で分析の対象とする知覚表現として、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に関わる日本語の知覚表現（特に知覚動詞とこれに関連する複合的知覚表現）の基本的特徴を、次の視点から体系的に分析している：(i)問題の知覚が一方向的な知覚か全方位的な知覚か、(ii)問題の知覚が遠感覚か近感覚か、(iii)問題の知覚が意図的、能動的になされるか非意図的、受動的になされるか (iv)問題の知覚表現が単一の動詞で表現されるか複合表現の形で表現されるか、(v)問題の知覚表現が文の統語フレームにおいていくつの項（1項、2項、等）をとるか。本章では、以上の視点から、従来の知覚表現の研究では意味的、統語的な対応づけが明示的になされていなかった知覚動詞と知覚の複合表現の関係を体系的に明らかにしている。特に注目すべき事実としては、次の事実が挙げられる：(i)基本的な五感の他動詞（「見る」、「聴く」、「嗅ぐ」、「味わう」、「触る」）のうち、味覚の他動詞だけは自動詞との交替が認められない。(ii)第六感の感覚に関わる動詞の場合には、逆に自動詞は存在するがこれに対応する他動詞は存在しない。(iii)聴覚、嗅覚、触覚、第六感に関わる自動詞（「聴こえる」、「匂う」、「感じる₁」、「感じる₂」）と味覚の他動詞（「味わう」）には、知覚の複合表現（「音がする」、「匂いがする」、「味がする」、「感じがする」、「気がする」）が存在するが、視覚に関わる自動詞（「見える」）にはこれに対応する知覚の複合表現が存在しない。本章の知覚表現の感覚モードに関する諸特徴とこれらの知覚表現の表層レベルの分布関係に関する体系的な考察は、本論文における次章以降の知覚に関わる言語現象の分析の背景となる。 第4章では、遠感覚の知覚の他動詞、自動詞の構文に関わる態の対立の問題を考察している。態の対立に関し、日本語では、視覚と聴覚の他動詞には形態的には派生の関係にある自発形が存在する（「太郎は富士山を見た」／「（太郎には）富士山が見えた」、「太郎は笛の音を聞いた」／「（太郎には）笛の音が聞こえた」）。これに対し、同じ遠感覚の嗅覚の動詞の「嗅ぐ」には派生形「嗅げる」はなく、自動詞の「におう」、「香る」が存在する（「太郎はバラを嗅いだ」／「*（太郎には）バラの匂いが嗅げた」／「バラが {匂う/香る}」）。本章では、この種の態の対立に関わる知覚同士の分布関係を綿密に分析している。従来の日本語の文法研究では、感覚動詞以外の他動詞と自動詞の対応は広範に研究されているが、本章で考察してい			

る知覚動詞の他動詞と自動詞の統語的な分布関係は明らかにされていない。次に本章では、五感に関わる知覚動詞を特徴づける認知プロセスを分析し、基本的な感覚モードが異なる知覚表現の間に、A. 〈知覚者から知覚対象への認知プロセス〉と B. 〈知覚対象・刺激の発生源から知覚者への認知プロセス〉という双方向性が存在する事実を、日本語と英語の視覚、聴覚、等に関わる言語事例に基づいて検証している。(A のタイプ:「富士山に目をやった」/“I turned my eyes to Mt. Fuji.”、B のタイプ:「富士山が目に飛び込んで来た」/“Mt. Fuji came into view.”)

第5章では、五感の知覚動詞のメタファー的な意味拡張のメカニズムの解明を試みている。本章では、視覚、聴覚、嗅覚、味覚の知覚モードの違いが、それぞれの五感の基本的な意味から、思考・推論・判断、等の抽象的な意味にメタファー的に拡張される事例を綿密に分析し、視覚から聴覚、聴覚から嗅覚、嗅覚から味覚に行くに従って、問題の五感の基本的な意味から思考・推論・判断、等の抽象的な意味へのメタファー的な拡張の可能性が低くなる事実を検証している。本章では、五感の知覚動詞の意味拡張の以上の制約を確認し、さらに各五感に関わる知覚動詞の意味拡張の制約も明らかにしている。例えば、視覚動詞は概念操作である思考へ拡張する傾向がある。これは嗅覚動詞でも認められるが、後者の場合には概念的な〈気づき〉のような概念操作に拡張する傾向がある。一方で、聴覚動詞は、基本的には聴覚情報、言語情報に関する行動のスクリプトに沿った拡張をする傾向がある。本章では、以上のような各五感のモード固有の意味拡張の個別的な制約を明らかにしている。

第6章では、前章までの基本的な知覚動詞と相補的に使用される五感の複合動詞の体系的な記述を試みている。本章では、前項が知覚動詞である複合動詞をコーパスに基づいて広範に収集し、後項動詞が前項の意味をどのように詳述するかという観点で複合動詞を分析している。また、知覚動詞を前項に持つ複合動詞の生産性を観察するとともに、知覚動詞の「見る」、「聞く」、「嗅ぐ」の感覚モダリティの違いに注目し、これらの動詞を含む複合動詞の後項の分布をコーパスから抽出している。さらにこの分布に基づき、この種の知覚動詞を特徴づける感覚モダリティの違いが、知覚の複合動詞の生産性に与える認知的制約を明らかにしている。

第7章は、前章までに考察されなかった基本的な接触動詞の対(「さわる」/「ふれる」)の他動性の違いと、この種の知覚動詞と他の知覚動詞の意味拡張の生産性の違いについて考察している。本章では、これらの二種の動詞が生起する言語文脈を広範な具体事例に基づいて分析し、基本的に「さわる」の方が「ふれる」より他動性が高い点、両者のメタファー的な意味拡張(特に、心理的、感情的な意味のドメインへのメタファー的な意味拡張)の方向性の違いが認められる点を検証している。これまでの五感の知覚動詞の研究では、「さわる」/「ふれる」に代表される動詞は、触覚動詞の一種と見なされている。これに対し本章では、この種の知覚動詞を、接触動詞の一種として再規定している。本章ではその証拠として、この種の動詞は、その主語に来る名詞の種類が視覚、聴覚、等に代表される他の知覚動詞とは異なる事実(「手がさわる」、「肌がふれる」のように動作主以外の無生物名詞も主語に生起する事実を指摘している。本章では、この種の事実に基づき、味覚等の触覚知覚と体感に基づく接触知覚を体系的に区分している。

第8章では、理論・実証の双方の観点から見た本研究の意義と今後の展望について論じている。

(論文審査の結果の要旨)

知覚表現の研究は、日常言語の認知のメカニズムの解明のための基礎研究として重要な役割を担う。本論文は、認知言語学の枠組みに基づき、日・英語の知覚表現（特に、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚を中心とする知覚動詞とこの種の知覚動詞に基づく複合的知覚表現）の意味的側面と文法的側面の解明を試みた理論的・実証的研究である。

これまでの知覚表現の研究では、五感に関わる知覚動詞の自・他対応（自動詞・他動詞の交替）、自動詞・他動詞の形態的な構造の分析、それぞれの知覚動詞の字義通りの意味記述はなされてきている。しかし従来の研究では、日常言語の修辞性の観点から見た知覚表現の意味拡張の綿密な記述・分析はなされていない。本論文は、認知言語学の認知意味論（特に、概念メタファーの意味論）の枠組みに基づき、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚を中心とする知覚動詞の意味拡張のメカニズムの解明を試みている点に独創性が認められる。特に本論文では、視覚、聴覚、嗅覚、味覚の知覚モードの違いが、それぞれの五感の基本的な意味から、思考・推論・判断、等の抽象的な意味にメタファー的に拡張される事例を綿密に分析し、視覚から聴覚、聴覚から嗅覚、嗅覚から味覚に行くに従って、問題の五感の基本的な意味から思考・推論・判断、等の抽象的な意味へのメタファー的な拡張の可能性が低くなる事実を検証している。これまでの言語学の研究では、感覚的な身体性が日常言語の思考、推論、判断、等の抽象的な意味に関係している点是指摘されているが、知覚を特徴づける五感のどの感覚モダリティが、思考・推論・判断、等の抽象的な意味への拡張を動機づけているかは明らかにされていない。以上の意味拡張に関する事実、言語と思考、等の抽象概念の相互関係を明らかにしていくための基礎的な研究として重要な意味を持つ。

本論文では、五感に関わる知覚動詞を特徴づける認知プロセスを分析し、基本的な感覚モードが異なる知覚表現の間に、A. 〈知覚者から知覚対象への認知プロセス〉と B. 〈知覚対象・刺激の発生源から知覚者への認知プロセス〉という双方向性が存在する事実を、日本語と英語の視覚、聴覚、等に関わる言語事例に基づいて検証している。(A のタイプ: 「富士山に目をやった」 / "I turned my eyes to Mt. Fuji."、B のタイプ: 「富士山が目飛び込んで来た」 / "Mt. Fuji came into view.") 知覚表現に関わるこの二つの認知プロセスの存在は、表層レベルにおける構文の分布関係を、言葉の背後に存在する言語主体の一般的な認知能力としての図／地の反転作用によって予測する点で興味深い。

以上の認知プロセス（〈知覚者から知覚対象への認知プロセス〉と〈知覚対象・刺激の発生源から知覚者への認知プロセス〉）は、上記のタイプの知覚表現の表層分布を一般的に予測するだけでなく、日常言語の視覚表現は、根源的に触覚の原初的な感覚のメタファー的な拡張に根ざしている点を明らかにしている。この点は、本論文で指摘している視覚表現の事実（「あの男に目をつける」 / 「あの男が目につく」、
"His eyes were glued to the interesting TV." / "The TV struck me as interesting.") から明らかである。言語事実とは独立して考えた場合、基本的に視覚、聴覚、

等の五感の感覚は、人間の知覚システムにおいてモジュール的に独立した感覚として存在している。しかし、五感の発達過程から見た場合、触覚は視覚、聴覚、等の他の五感の感覚の発現の背景となる原初的な感覚として重要な役割を担う。本論文で考察した視覚構文の表層分布に関する以上の事実は、言語学の領域から、五感の発達過程を裏づける経験的な証拠として重要な意味を持つと言える。また、この種の事実に関する研究は、日常言語の共感覚のメカニズムを研究していくための基礎研究としても重要な役割をになう。

認知言語学の最近の研究では、語彙レベル、文レベルの形式と意味の相互関係に関する研究だけでなく、事態認知を反映する文の背後に存在する言語主体のグラウンド化（グラウンドの前景化／背景化）のプロセスと表層レベルの統語パターンの分析が試みられている。しかし、これまでのグラウンド化の研究は、主に物理的なエネルギーの移動に関わる事態（物理的原因、変化、結果に根ざす事態）を叙述する他動詞構文と自動詞構文のグラウンド化の研究が中心となり、知覚行為に関わる事態（視線の移動、メンタルパスの移動、知覚刺激の移動、等に関わる事態）のグラウンド化に関する研究は殆どなされていない。本論文は、認知言語学で提唱されている発話のステージ・モデルに基づき、視覚と聴覚の知覚構文を中心とする日・英語の表層レベルの統語パターンを比較・検討し、両言語における言語主体（発話主体）のコード化の違いを、グラウンド化の認知プロセスの違いに基づいて規定している。この研究は、言語類型論の観点から見た異言語の統語パターンの比較研究に貢献する。

本論文では、五感の知覚動詞の意味的側面と文法的側面の研究が主眼となっているが、日常言語の知覚に関わる言語現象として味覚の叙述に関する言語文化比較と触覚を中心とする擬音語・擬態語の身体性の一面も考察している。さらに、本論文では、知覚表現と手話の相互関係の重要性も指摘している。これらは、本論文の主眼となるテーマではないが、感覚表現の言語文化比較と知覚言語と手話の相互関係の問題は、各言語に反映する世界観、感覚に根ざす言語伝達と非・言語伝達の相互関係を解明していくための具体的な検証の場として注目される。この方面の研究は、今後の研究課題として残される。

本申請者が所属する言語科学講座の目的の一つは、言語の構造、意味、運用、等に関わる人間の知のメカニズムの解明にあるが、本研究は、この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に、今後の言語学と認知科学への貢献がさらに期待される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年2月12日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降